

文脈におけるナラの機能に関する —考察

—話題提示としての機能を中心に—

鄭 相美

キーワード

話題提示・根拠提供・仮定表示・顕在的な話題・潜在的な話題

1. はじめに

一般的に日本語の条件表現といえば、「バ」「ト」「タラ」「ナラ」が挙げられる。この4種の表現の使い分けについては多くの先行研究もあり、その教え方についても様々な試みがなされているが、今なお、これらの表現は、学習者にとって、上級になっても習得しにくいものの一つとなっている。

また、多くの教科書がこの四つの仮定・条件表現を中級程度のレベルで一度にまとめて取り上げていることと、この四つの表現をいずれも韓国語の「면 / ミョン /」という表現に対応させてきたこともあり、韓国人学習者にとって、日本語の仮定・条件表現は大変混乱する学習項目の一つなのである。

中でも、ナラは、仮定・条件表現としての機能だけではなく、文の中で多様な働きをしているにもかかわらず、他の三つの表現に比べて、あまり研究されていないため、最も難しい表現の一つになっている。

これまでのナラに関する研究は、形態上の研究やナラ自体の意味の研究に偏っており、談話の中でなぜナラが用いられ、どのような働きをしているのかについては、あまり触れられてこなかった。

本稿では、これまでのナラに関する先行研究を見直し、談話資料の中でナラが現れる場面を分析し、その文脈におけるナラの機能を明らかにすることにより、ナラの特徴の解明と教え方の提案を目的としている。

2. 研究の枠組み

2.1. 先行研究

ナラの意味・用法に関するこれまでの研究の中で、蓮沼他 (2001)¹ はナラについてか

なり細かい分類をしている。

表1 蓮沼他(2001:45～69)によるナラの用法の分類

分類	ナラ前件の形態	用 法
聞き手の 気持ち	基本形+ナラ	前件：会話中に相手が言った予定・意志や、相手の様子から想像できる状況など 後件：自分の意志や判断・相手への働きかけ
	タ形+ナラ	前件：対話相手から聞いたばかりの過去の事実 後件：判断・相手への働きかけ
話題の引 継ぎと提 示	名詞+ナラ	①前件：対話の相手が言った内容や、先行する談話の内容から予測できるようなこと 後件：前件についての判断や意志、相手への働きかけなど(主題用法) ②主題ではなく、条件を表す場合がある
	疑問語+ナラ	疑問文を表すことができる。
	動詞基本形+ナラ	Xの行為を話題としてとりあげる用法(主題用法)がある。 「名詞+ナラ」と同じ意味を表す。
未来の予 測を表わ す	動詞、形容詞の基 本形+ナラ	前件：未来の出来事に関する予測や、現在の状態に関する予測 後件：前件に基づく判断 依頼・義務・意志など、働きかけに関わる表現も現れる。 「前件→後件」の順序も、「後件→前件」の順序も可能。
仮定を表 す	タ形+ナラ	①前件：未来の仮定 後件：前件に基づく判断や、自分の意志・依頼など ②過去の仮定や、過去の事実に反する仮定 ※仮定を表すナラには使用制限がある。 ・一般的、習慣的関係を表す場合には使えない。 ・時間の経過など、起こることが確実なことを表す場合には使えない。
	状態性の述語の基 本形+ナラ	現在のことにに関する仮定や、現在の事実に反する仮定
複雑な推 理	基本形+ナラ	①前件：事実 後件：事実反すること (前件を知らなかったために、前もって適切な行動がとれなかったことを悔やむ気持ちを表す) ②前件：事実であるという判断 後件：前件を根拠にして、当然の帰結、判断 ③前件の判断が成り立たないということを主張する表現に使われる。
	タ形+ナラ	前件が事実でないことを主張するような表現に使われる。

蓮沼他（2001）によると、ナラには、聞き手の気持ちを表す用法や、名詞に直接続いて主題を表す用法など、特別な使い方があるとして、ナラを五つの用法に分類している。蓮沼他（2001）のナラの分類を表にまとめてみると、【表1】のようになる。

【表1】では、すべての用法に関してナラの前件に来る品詞の形態を提示しているが、同じ形態がいくつかの用法に重複しているため、ナラの前件の形態の提示はあまり意味がないように思われる。また、名詞がナラの前件に来るのは「話題の引継ぎと提示」だけになっているが、「名詞＋ナラ」は他の用法にも見られる形態であるため、学習者が誤解するおそれがあるのではないかとと思われる。なお、「聞き手の気持ち」は結局、ナラの前件を話題として取り上げ、聞き手の気持ちを表す用法であるため、「話題の引き継ぎと提示」の範囲に含まれるのではないかと考えられる。

益岡（1993）は、他の条件表現と異なるナラの特徴について、「表現者自身の判断や態度が後件に示されることによって表現の重点が後件にある」と指摘している²。ナラの後件に行動展開表現や理解要請表現³などを用いる際に、その後件の根拠としてナラの前件が取り上げられるという考え方であるという点では、本稿は、益岡（1993）と同じ立場をとるものだといえる。

ところが、益岡（1993：12）は、ナラの後件に対する前件のかかわり方については、次のように述べている。

表現者の判断や態度が表される後件に対して、前件はどのようなかかわり方をするのであろうか。前件の役割は、後件で判断や態度を表現するための基盤となる事柄を提示する点にあると考えられる。前件が成り立つことを仮に想定し、その想定のもとで、後件で判断・態度の表明がおこなわれる、というわけである。ここで大切な点は、前件が成り立つかどうかの判断自体は保留されているという点である。前件が真であることが仮定されているだけのことである。

結局、ナラの機能はあくまでも「仮定表示」という考え方にとどまっており、なぜ文の中にナラを伴う前件が設けられるのかについては、具体的な説明がない。

【表2】庵他（2000a：224～225）におけるナラの用法の分類

用法説明	例 文
<ul style="list-style-type: none"> ・最も典型的な用法 ・聞き手の発言を受ける用法 ・前件：聞き手の発言によって新しく知ったこと 後件：前件に基づく帰結 	<p>(1) A：携帯電話を持っています。 B：携帯電話があるなら、いつでも連絡できますね。</p> <p>(2) A：スーパーへ行ってくるよ。 B：スーパーへ行くのなら、しょうゆを買ってきて。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・前件：純粋に話し手が仮定したことがら ・後件：前件に基づく帰結 	<p>(3) もしスーパーへ行くのなら、しょうゆを買ってきて。</p>

庵他（2000a）は、「とりたて助詞」と「複文と接続詞—条件—」の2項目にわたってナラを取り上げている⁴。しかし、「とりたて助詞」の項目においては、ナラをその1種類として挙げてはいるが、詳しい説明はない。「複文と接続詞—条件—」の項目におけるナ

ラは、二分されており、その内容を筆者がまとめてみると、【表2】のようになる。

【表2】によると、ナラの前件には、「聞き手の発言によって新しく知ったこと」しか用いられないように述べられているが、実際のナラの使用場面をみると、ナラの前件には、聞き手による発話はもちろん、より多様な内容が用いられることが分かる。これについては後述する。

なお、庵他(2000b)は、ナラを「とりたて助詞」の項目の主題を表す表現として「ハ」とともに取り上げられており⁵、次のような例文をあげている。

(4) A: 林さんには紅茶をあげることにしない? 最近紅茶に凝ってるって言ってたから。

B: そうね。紅茶なら銀座にいいお店があるわよ。種類がすごく多いの。

例(4)について、庵他(2000b)は、「相手が述べたり質問したりしたことの中から主題を受け取って、それについて話を展開させる場合」と説明している。

ところが、この用法は、初級レベルからも十分に導入できると考えられることから、庵他(2000a)の「とりたて助詞」の項目にも、より詳しい説明が必要なのではないかと思われる。

2.2. 研究目的

以上の先行研究から見たこれまでのナラに関する研究の問題点は、ナラの前件の形態に問題意識が偏っていること、ナラはあくまでも仮定表現であるということにとらわれていること、また、学習者のレベルに応じたナラの用法が導入できるように整理されていないことなどが挙げられる。

談話の中のナラの機能を見ると、一般的にいわれる「仮定」の機能もあるが、先行研究からも分かるように、聞き手によって持ち込まれた話題を話し手が受け取って話し手自身の意見などを述べるということがナラの典型的な特徴であるといえる。すなわち、後件に来る話し手の発話(判断・意見など)の「根拠」として聞き手の発話などをナラの前件にすることにより、ナラの後件に述べられる話し手自身の行動展開表現や理解要請表現などを聞き手が受け入れやすくするという役割を果たしているのではないかと思われる。

本稿では、これまでのナラに関する研究の問題点をふまえて、様々な談話の場面のナラの用例を収集し、その機能を分析することによって、ナラの前件と後件の関係を考察し、文脈におけるナラの導入目的を明らかにする。各々の文脈においてなぜナラが用いられたのかが分かれば、ナラの根本的な機能が見えてくるであろう。

そこで、本稿では、談話(戯曲やドラマのシナリオ)の中に現れるナラの用例を収集し、それらを各々の文脈によって分析することによって、ナラの多様な機能を考察する。なお、その結果をもとに、「ナラ」表現の習得を容易にする方法を探ることを目的とする。

2.3. 研究方法

本稿では、さらに多くの談話資料を考察するために、会話形式でストーリーを展開していくドラマ・シナリオと戯曲や、テレビ・ドラマの録画を文字化した資料を用例収集の対象とする。調査資料は以下の通りである。各資料の作品名の略称を()の中に記す。

【表3】 ナラ用例の出典リスト及び機能分類の内訳

資料種類	作品名	話題提示	根拠提供	仮定表示	合計
ドラマ シナリオ	1.『徹底的に愛は…』(徹)	25(0)	56(13)	13(3)	94(16)
	2.『並木家の人々』(並)	10(0)	34(3)	9(0)	53(3)
	3.『ビューティフルライフ』(ラ)	22(15)	40(34)	13(10)	75(59)
	4.『眠れる森』(森)	9(1)	36(6)	18(3)	63(10)
	5.『逢いたい時にあなたはいい…』(逢)	7(3)	24(20)	19(14)	50(37)
ドラマの 文字化資料	6.『ランチの女王』(女)	11(2)	19(10)	6(3)	36(15)
	7.『おとうさん』(父)	21(11)	60(31)	11(9)	92(51)
	8.『イヴのすべて』(イ)	18(3)	26(2)	10(5)	54(10)
	9.『Autumn in My Heart』(秋)	14(1)	37(1)	16(0)	67(2)
戯曲	10.『オケビ』白水社(オ)	11(1)	11(6)	3(1)	25(8)
	11.『ヒネミ』白水社(ヒ)	2(0)	7(6)	3(3)	12(9)
	12.『東京ノート』晩聲社(東)	5(0)	5(3)	1(0)	11(3)
	13.『魚の祭』白水社(魚)	2(2)	1(0)	5(3)	8(5)
合 計		157(39)	356(135)	127(54)	640(228)

なお、ナラは談話の中において、ダッタラという形式として現れることが多いことから、ダッタラの用例についても本稿の考察対象とする。

【表3】の作品から得られたナラ（ダッタラ）の用例は延べ640例で、それらを含む各々の文脈からナラの前後関係などを分析し、各用例の機能を分類することによって、ナラが持つ談話の中での特徴を明らかにする⁶⁾。

3. 文脈におけるナラの機能

本稿の用例収集資料から得られた640例のナラの用例をその場面の文脈から分類した結果、「話題提示の機能」「根拠提供の機能」「仮定表示の機能」という3種の機能に分けることができた。各機能について具体的に説明すると、次のようになる。

まず、聞き手によって取り上げられた話題を、ナラによって取り立てることにより、後件の行動展開表現や理解要請表現を実現させることを目的とする場合を「話題提示の機能」とする。このようなナラは「ハ」に置き換えても、文脈上、大きな意味の違いは見られないことが多い。

(1)

優 : お父さん、今年でいくつになるんだっけ。

晶 : 57。

優 : サラリーマンなら、もうすぐ定年じゃない。

恵 : でもさ、お父さんなら【ハ】大丈夫でしょう。あんなに元気なんだしさ。

まこと：いや、分かんないよ。60 過ぎるとね、急に病気になる人とか、老け込む人、多いんだから。
優：ちょっと、待ってよ。ねえ、そうなったらさ、老後の面倒はだれが見るわけ？（父 6）

つぎに、ナラの前件が後件の根拠として提示され、ナラを因果関係を表わす「カラ・ノデ・ノニ」に置き換えても「前後の文脈が通じるような場合を「根拠提供の機能」とする。このようなナラ文はそれまで話題になっていたことや聞き手の発言などを根拠（理由）としてとりあげ、ナラの後件に述べられる話し手自身の行動展開表現や理解要請表現などを聞き手が受け入れやすくするための役割を果たしているといえる。

(2)

てるの：家事って、レベルの差はあっても、結局誰にでも出来るものね、誰にでも出来ること
しても、つまらないわ。

論平：僕は、スパゲッティーしか出来ないよ。

てるの：スパゲッティーが出来るなら [カラ]、他の料理も出来るはずよ。勉強して。

論平：勉強？

てるの：人間は学習する動物よ。ちょっと勉強すれば、料理なんて片手で出来るわ。論平の片
手と、あたしの片手で、十分一人前に家のことくらいこなせるわよ。わたし達には、
もっと大切な仕事があるんだから。（徹 4）

また、「根拠提供の機能」の用例の中で、後件に聞き手の言動に対する批判・皮肉などを示す内容が来る場合は、ナラを「ノニ」に置き換えられることが多い。

(3)

船のサイド・デッキ

直季：国府と貴美子さんの愛は絶対的で、あんたなんかが付け入る隙はなかった。

輝一郎：まあ、そんなとこだ。貴美子の父親は、市会議員の職権を濫用して、国府を町から追
い出そうとした。ところが、国府はしぶとくて、貴美子と駆け落ちする勢いでさ。ど
うやったって、国府には適わなかった。で、思いついたんだ、国府に似合いの地獄っ
てやつを。

正輝：……（息子のおぞましさに震える）

輝一郎：貴美子とその一家を皆殺しにした犯人……国府にはそうする動機が十分にあったろ。

直季：貴美子さんをそれほど愛していたんなら [ノニ]、どうして殺そうなんて……！

輝一郎：刃物がすると彼女の体に入って、心臓に突き当たる感触……目の前の女が自分の女
になったっていう実感だった。（森 61）

最後に、一般的によく取り上げられる「仮定表示の機能」であるが、実際起きるかどうかがまだ分からない状況を仮事実として語ったり、実際に起きた事実と反する反事実などを語るなどの用例が見られる。

(4)

有本 : (司会で) えー、若林部長も今日は今までのわだかまりを捨て、快く出席して下さいました。では、部長、一言ご挨拶をお願いします。

若林部長: (仮説ステージに上がり) 中村くん、結婚おめでとう。

みんな、ザワつく。

若林部長: という挨拶の出来る送別会だったら、どんなに気持ちよく出席できただろうか。

(達 47)

以上の「話題提示の機能」、「根拠提供の機能」、「仮定表示の機能」の三つに分けたナラの機能の中で、本稿では「話題提示の機能」を中心に論ずることとする。

4. 話題提示としての「ナラ」

ここでは、「話題提示の機能」として用いられているナラの用例を、主題を表す「ハ」に置き換えた時、どのような「ハ」にあてはまるのかによって、さらに三つに分けて考察していくことにする。

4.1. 「ナラ」⇒「ハ」

ナラがそのまま「ハ」に置き換えられる機能で、この機能の用例の多くは、名詞につくものが多い。聞き手が取り上げた話題をそのまま用いたり、聞き手の発言に応じて話し手が新しい話題を提示したりする機能である。ナラの用法としてよく取り上げられる「情報提供」もこの機能に入る。

(5)

杏子、雑誌の棚をガラガラッと見ている。

お目当ての物がないらしい。

店員たちが、来た雑誌を荷ほどきしているのを、今度はジッと見ている。

店員1: オネーサン、何か?

杏子 : 「ラ・マン」……ないかな。

店員2: あ、それだったら [ハ]、こっち。

杏子 : あ、すみません!

(ラ 7)

用例 (5) は、日本語の教科書などによく取り上げられる「情報提供」のナラ (ダッタラ) の典型的な用例である。聞き手の発言の中で「ラ・マン」という顕在的な話題を、話し手はソレで言い換え、聞き手が求めているソレ (ラ・マン) の場所に関する情報を与えている。

用例 (6) は、話し手を食事に誘いたがっている聞き手の「何が好きですか」という質問に対して、「タイ料理以外」をナラで取り立てることにより、何でもいいという話し手の気持ちを聞き手に伝えている。この用例の後件は、理解要請表現のように見えるが、これはさらにタイ料理以外は何でもかまわないのでぜひ食事に誘ってくれるようにという聞

き手の行動を促す行動展開表現につながる。

(6)

ハーブ : 何が好きですか。

コンダクター : タイ料理以外だったら [ハ] 何でも OK。あれがダメなんです、ほら。 (オ 5)

なお、聞き手 (ハーブ) が言葉としてはっきり表わしてはいないが、その言動からうかがえる話題を、話し手 (コンダクター) がナラで取り上げる用例も見られる。

(7)

サツと出される本。

レンタル着物のカタログ見ていたサチ、顔を上げる。

サチ : ああ。

何冊か。

ブルーストとか、なんかかんとか。

どうせ読まないんだから、何でも一緒風な選本。

柊二。

サチ : いいよ、借りなくて。どうせ読まないでしょ。

柊二 : ……。

サチ : 杏子だったら [ハ]、まだだよ。

柊二 : —。あそ。

と、サッサと行こうとする。

(ラ 17)

用例 (7) は、何日間も職場 (図書館) を休んでいる杏子が気になって、何度も図書館に足を運んでいる聞き手 (柊二) の様子から、話し手 (サチ) は「杏子」をダッタラによって話題として取り上げ、彼女が今日も来ていないという情報を聞き手に与えている。

4.2. 「ナラ」⇒「抽象名詞+ハ」

この機能は定型表現として導入されるナラの用例で、「～ナラ～デ」または「～ナラ～ト」の形として用いられる。ただ、この場合のナラはその文脈によって、「人・時・こと」などの抽象名詞を伴う「ハ」に置き換えられると思われる。

用例 (8) は、前もって連絡もせずに自分のところにいきなり訪ねてきて困惑させる聞き手 (花) の行動に対する話し手 (大石) の批判の気持ちを示し、これからは前もって連絡をしてから訪ねてくるように、または、もう訪ねてこないようにという行動展開表現につながる。

(8)

大石 : (アワを食ったように) 君、なんだってこんな所に……困るよ、君。

花 : (申し訳なく) ごめんなさい。永い間連絡もしないで。忙しいことが続いてなかなか来れなかったんです。

大石：来るなら「時ハ」来ると電話くれりゃいいんだ。今ね、部屋に女房と子供が来てるんだ。

(並 53)

4.3. 「ナラ」⇒「格助詞+ハ」

この場合も定型表現として使われる例が多く、今回の考察では「～グライナラ」と「～タメナラ」という用例があった。「～グライナラ」の場合は「～ヨリハ」に置き換えられると思う。この場合は、現時点で起こる可能性がある話題、または、聞き手の発話や態度を基に、後件にそれよりもっと極端な内容を用いたり、アドバイスをしたりするのが特徴である。前者の場合は、後件に極端な内容を用いることによって、ナラの前件が話し手にとって、どんなにいやなことなのかを表わすことが多い。後者の場合は、ナラの前件に「悩む」という動詞がくることが多く、後件で聞き手の悩み事に対して話し手がアドバイスを与える用例が多い。次は、前者の用例で、ナラの後件に「死ぬ」という極端な内容を取り上げることによって、絶対に警察には捕まらないという話し手の意志を示している。

(9)

修史：捕まるぐらいなら「ヨリハ」、死んでやるっつうの。

(女 35)

「～グライナラ」の特徴は、用例(9)のように、ナラの前件と後件がいずれも話し手自身に関する内容の場合は、後件に前件よりも極端な事柄を用いることで、前件のようなことを絶対にしない、または、前件のような状況には絶対にならないという話し手自身の意志を表す場合が多い。一方、用例(10)のように、ナラの前件が聞き手に関する内容の場合は、後件は話し手から聞き手への助言を示すことが多い。

(10)

同・食堂前の廊下

論平、てるのが出て来る。

論平：何？

てるの：(きっぱり) あたし、中途半端に問題抱えて、悩んでるの好きじゃないの。

論平：……

てるの：悩むくらいなら「ヨリハ」、積極的に対処して、早目に妥協点を見つける方が合理的だわ、あたしは、そういう考え方なの。

論平：……わかってるよ。

てるの：論平がはっきりしないなら、あたしがはっきりさせるけど、いい？

論平：……君がそうしたいなら、仕方ないんじゃないか？

てるの：……！(傷つくが、動揺はみせない) わかったわ(去る)。

論平：……

(徹 23)

用例(10)は、前の彼女と新しい彼女の間で気持ちが整理できず悩んでいる聞き手(論平)に対し、積極的に対処して早く妥協点を見つけるように、という話し手(てるの)のアドバイスが後件に述べられている。

この外、用例 (11) のように、「～タメナラ」という用例も、「～タメニハ」に置き換えられる。

(11)

直季：実那子に思い出させたくなかった。過去が忍び寄ってるんなら、逃げてほしかった。そのためなら [ニハ]、実那子の今を壊してやろうと思った。(森 49)

5. 結論

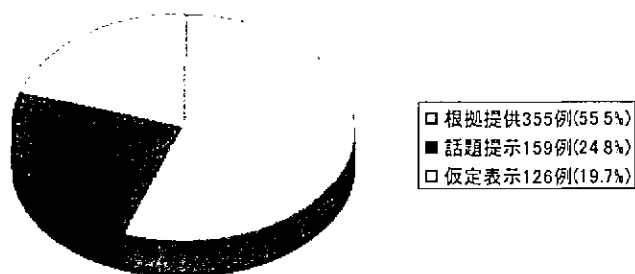
文脈におけるナラの機能を明らかにするために、ドラマの文字化資料やドラマ・シナリオ、戯曲を対象として、ナラの用例を収集し、それらの用例をその場面の文脈から、上記の「話題提示」、「根拠提供」、「仮定表示」という3機能に分類した結果、【図1】のようになった。今回の分析結果を見る限り、ナラは、これまで多くの日本語教科書においてよく取り上げられてきた「仮定表示」よりも、むしろ、後件の「根拠提供」として用いられることが最も多いことが分かる。

根拠提供の「カラ・ノデ・ノニ」、話題提示の「ハ」があるにもかかわらず、なぜナラを用いるのかについては、ナラの「仮定表現」という性格から説明できる。すなわち、聞き手の発言や行動及び話題に対する話し手の確信などをナラの前件にする際、聞き手への再確認や話し手自身の仮定のように示すことによって、「カラ」や「ハ」などを用いた時に聞き手に感じさせかねない「あつかましき」や「おせっかい」などのマイナスの印象を避けることができるためではないかと考えられる。また、聞き手の発話を話し手が半信半疑の気持ちで受け入れる場合にも、ナラは有効に働くといえる。

このような機能は、ナラという表現が「仮定・条件」という領域と「取り立て」という領域にまたがっていることによるものではないかと思われる。

談話レベルの機能から見たナラの特徴は、ナラの前件に聞き手の発話や態度、もしくは、話し手自身の判断の根拠などを述べ、それに基づいて話し手自身または聞き手の利益を実現させるべく、談話を展開させることにあるのではないかと思われる。

また、ナラの導入時期について、ナラの多様な機能について十分に説明することがなかった⁸⁾。



【図1】本稿の考察対象用例の機能分析の結果

ナラの多様な機能の中には、初級段階から導入できるものもあり、学習者のレベルに応じて、何度かにわたって取り上げることにより、効率よく習得させることができるのではないと思われる。

6. 日本語教育への応用

6.1. 初級レベルにおけるナラの導入

初級レベルでは、聞き手に求められる顕在的な話題に応じる機能のナラを取り入れる。

〈1〉〈ハ〉としての機能（顕在的情報を求める聞き手—情報を与える話し手）

A：温泉に行きたいんですが、どこがいいでしょうか。

B：温泉ですか。温泉なら、箱根がいいですね。 (作例)

例文〈1〉のように、温泉に関して顕在的に情報を求めている聞き手に対し、それに応じる形のナラを取り入れることができるとと思われる。これに関しては、実際の初級クラスで〈自分の国を旅行したい聞き手に情報を求められ、情報を与えるという内容〉の練習をさせた結果、この段階で十分に学習できるということが分かった。この段階ではとりあえず、形式的に簡単な〈ハ〉としてのナラだけを導入する。

6.2. 中級レベルにおけるナラの導入

初級レベルに続き、中級レベルでも〈ハ〉としての機能を導入するが、この段階では、顕在的な話題ではなく、潜在的な話題に対して情報を提供する形を導入する。なお、形式上、やや複雑な〈抽象名詞＋ハ〉と〈助詞＋ハ〉を加えて、顕在的な状況における使い方を導入する。

〈2〉〈ハ〉としての機能（潜在的に情報を求める聞き手—情報を与える話し手）

A：日本での生活はどうか。

B：大変ですね。物価は高いし、アルバイトはなかなか見つからないし。

A：アルバイトのことなら、留学生センターに行ってみればどうですか。 (作例)

例文〈2〉のように、「日本の生活の大変さ」を述べている聞き手の発言の中から「アルバイトを必要にしているだろう」という潜在的な情報要求を感知し、それに対する情報提供の形のナラを導入する。

〈3〉〈抽象名詞＋ハ〉としての機能（顕在的な話題に対して忠告・不満を述べる話し手）

A：遅くなつてすみません。

B：遅れるなら遅れるで、前もって連絡くださいよ。 (作例)

「遅れた聞き手の顕在的な状況」に対して、忠告・不満を述べる話し手のナラをこのレベルで導入できるとと思われる。

〈4〉〈助詞＋ハ〉としての機能（顕在的な話題に対して助言を述べる話し手）

A：留学、決まりましたか。

B：いいえ、まだ。いろいろあって、いまだに悩んでいます。

A：ひとりでそんなに悩むんだったら、両親に相談した方がいいんじゃないですか。（作例）

例文〈4〉のように、「留学のことで悩んでいる聞き手の顕在的な状況に対してアドバイスを述べる形のナラ」を提示する。

6.3. 上級レベルにおけるナラの導入

上級レベルの〈ハ〉としての機能は、聞き手の言動から話し手が言いたい話題を引き取ってその場の会話を展開する形のナラを導入する。この機能の導入によって、会話の主導権を握る談話管理能力が育てられる。なお、〈抽象名詞＋ハ〉と〈助詞＋ハ〉は、潜在的な話題に対しての使い方を取り上げる。

〈5〉〈ハ〉としての機能（話題を提示する聞き手―新しい話題に持っていく話し手）

A：寒くなりましたね。

B：そうですね。温泉にでも行きたいですね。

A：温泉なら、この前、お台場に新しい温泉ができたそうですよ。（作例）

例文〈5〉のように、聞き手の言動から、話し手が話題にしたい「温泉」を引き取ってその場の会話を展開していく形のナラを導入する。この機能の導入によって、会話の主導権を握る談話管理能力が育てられると思われる。

〈6〉〈抽象名詞＋ハ〉としての機能（潜在的な話題に対して忠告・不満を述べる話し手）

A：この前のお寿司、とてもおいしかったですね。

B：また行きたいなら行きたいと言えいいじゃないか。（作例）

先日の寿司屋にまた行きたい気持ちを遠回しに、すなわち、潜在的に話題にしている聞き手に対して話し手の意見を述べる形のナラを導入する。

〈7〉〈助詞＋ハ〉としての機能（潜在的な話題に対して自分の意見を述べる話し手）

A：この前はいろいろと手伝ってくれてありがとう。

B：君のためなら何でもするよ。（作例）

例文〈7〉のように、「手伝ってくれたことのお礼を述べた」聞き手の発言から、聞き手とのよい関係を望む話し手が自分の気持ちを述べるきっかけとしてナラを用い、話し手が会話の主導権を握る内容を提示する。

7. まとめと今後の課題

以上、談話の場面に現れるナラの機能を分析し、その文脈的意味から「話題提示」「根拠提供」「仮定表示」という三つの機能に分け、各機能について考察した。また、その結果に基づき、初級レベルから上級レベルにいたる、学習者のレベルに合わせて提示するナラの機能を、例文とともに提案した。

ナラの導入の際には、仮定・条件表現の一つだという曖昧な説明ではなく、後件の根拠提供や話題提示の表現だという説明とともに、学習者のレベルに合わせた各機能の適切な例文を提示することによって、効果的なナラの指導ができるのではないと思われる。

なお、ナラの多様な機能にもかかわらず、仮定・条件表現として韓国語の「ㄹ / 미ョン /」という表現にしか対応させてこなかったナラは、より多様な韓国語に対応する表現であることを証明すべく、日本語から韓国語訳された作品や韓国語から日本語訳された作品を対象として、対照研究を行うことについては、今後の課題としたい。

注

- 1 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001)、pp. 45 ~ 69
- 2 益岡隆志編 (1993)、pp. 11 ~ 14
- 3 蒲谷宏・川口義一・坂本恵 (1998)、p. 33
 理解要請表現—自己の感情・知識・情報などに基づく「表現内容」が「相手」に理解されることを「表現意図」とする「文話」。例えば、小学生を「相手」に「マグロは魚煩です。しかし、クジラは、魚類ではなく哺乳類です。」と説明するような表現など。
 行動展開表現—自己の感情・認識などに基づく「表現内容」が「相手」に理解されるだけではなく、それによって「相手」あるいは「自分」(またはその「両者」)が何らかの行動を起こし、その行動で「表現内容」が実現されることを「表現意図」とする「文話」。例えば、「すみません。水を一杯ください。」と頼んだり、「あの一、ビデオが見たいんですが、この部屋を使ってもよろしいですか。」と許可を求めたりするような表現など。
- 4 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著 (2000a)、pp. 224 ~ 225
- 5 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著 (2000b)、p. 332
- 6 各機能の用例数の () はダクダラの用例数を表す。
- 7 一般的な「置き換えられる」の概念は、用例 (1) で説明すると、次のようになる。

恵：でもさ、お父さんなら大丈夫でしょう。あんなに元気なんだしさ。

↓

恵：でもさ、お父さんは大丈夫でしょう。あんなに元気なんだしさ。

上の用例のように、ナラの代わりにハを用いても、文脈の流れに大きな意味の違いが見られず、置き換えた後も自然な文である場合、一般的に「ナラはハと置き換えられる」とされている。

しかし、本稿では、「置き換えられる」を、これよりもさらに広い概念として用いることにする。次の用例 (2) を見ていただきたい。

てるの：スパゲッティーが出来るなら、他の料理もできるはずよ。

↓

①てるの：スパゲッティーが出来るから、他の料理もできるはずよ。

②てるの：あなた、スパゲッティーが出来ると言ったでしょう。だから他の料理もできるはずよ。

もし、この用例中のナラを直接そのままカラに置き換えると、その結果は①のようになるが、この文は相当不自然な文になる。ところが、これを②のように書き換えると、理由のカラの概念を含みつつ、ナラを用いた文とさほど意味の違いのない文ができる。すなわち、ここではナラが文脈の中で、カラと同様の機能を負っていることがわかる。

本稿では、このように、カラ・ノデ・ノニの概念を含みつつ言い換えた文が、ナラを使用した原文と大きく意味が変わることがない時、「ナラを因果関係を表すカラ・ノデ・ノニに置き換えて前後の文脈が通じる」と規定して、「置き換えられる」をそのような概念で使うこととする。なお、置き換えることのできる接続助詞は、用例のナラの直後に [] に入れて、次のように記すこととする。

てるの：家事って、レベルの差はあっても、結局誰にでも出来るものね、誰にでも出来ることとしても、つまらないわ。

論平：僕は、スパゲッティーしか出来ないよ。

てるの：スパゲッティーが出来るなら [カラ]、他の料理も出来るはずよ。勉強して。(徴4)

- 8 ナラは、多くの教科書で他の仮定・条件表現とともに、中級段階において一度しか取り上げていない。
- 9 川口義一(1998)の〈顕在的な情報提供者〉、〈潜在的な依頼者〉から取り入れた概念で、会話の中で言葉として提示される話題を〈顕在的な話題〉、会話の表面には言葉として提示されないが、会話の参加者がその文脈から感知し、それをナラをもって取り上げる話題を〈潜在的な話題〉とする。

参考文献

- 有田節子・前田直子・逆沼昭子(2001)『条件表現』くろしお出版
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 著(2000a)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、(株)スリーエーネットワーク
- (2000b)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、(株)スリーエーネットワーク
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店
- 川口義一(1998)「意味記述の教材化」、『紀要』11、早稲田大学日本語研究教育センター
- (2000)「ナラ表現」の「文脈化」と「教材化」、『紀要』13、早稲田大学日本語研究教育センター
- (2000)「初級教科書の「ナラ表現」」、『講座 日本語教育』36、早稲田大学日本語研究教育センター
- 鈴木義和(1992)「話題のナラとその周辺」、『国田学園女子大学論文集』26、国田学園女子大学論文編集委員会
- (1993)「ナラ条件文の用法―聞き手との関係を中心に―」、『国田語文』7、国田学園国文懇話会
- 網浜信乃(1990)「条件節と理由節―ナラとカラの対比を中心に―」、『待兼山論叢』24、大阪大学文学部
- 仁田義雄(1987)「条件づけとその周辺」、『日本語学』6-9、明治書院
- 益岡隆志 編(1993)『日本語の条件表現』くろしお出版